

第20話 帰国生ということ

帰国生であること。それだけで、普通の子どもの2倍の可能性があります。英語が喋れるのだから、異文化を経験しているのだから。…というのは大人の考え方で、当人たちにとってはそれが悩みの種であることの方が多いかもしれません。特に年齢が低いほど、「周りと違う」ことを持て余してしまいがちです。

これまで、受験にとって有利であると考えながら帰国生を考えてきましたが、少し違う視点でも見てみましょう。

帰国生はいろいろな場面で、居心地の悪さを感じてしまうことがあります。よく、日本の学校に馴染めないということを耳にします。これはどういうことなのでしょうか。学校・生活習慣の無知などは、大した問題ではありません。そもそも、言葉も通じない環境も乗り越えてきたのですから、障害にもならないでしょう。悩みの種はいつでも、人間関係です。直接的ないじめにまでは発展しなくとも、なんとなく輪に入れない、学校が面白くない、という話はよく耳にします。

客観的に見ると、こういったケースは2つ原因が大部分を占めます。

1つは、日本の子どもたちの集団意識です。小学校の中・高学年で、どこからかやってきた転入生。テレビ番組もよく知らず、流行りの言葉もわからない。表面だけ見れば、異質な存在に映ってしまいます。見た目が外国人ならば、また対応も変わってくるでしょうが、そこは日本人。なんとなく雰囲気が違うということで敬遠され、孤立してしまう子ともあります。そんな中に飛び込んでいける子もいれば、学校が好きになれず塾に打ち込む子、「そんなものさ」と斜に構えている子、対応は様々です。

もう一つは、本人の問題。

「明るく活発な帰国生」といえば聞こえが良いですが、「空気を読めない」ということが同義の場合もあります。これは帰国生同士でも見られることで、塾に入ってくるなり「ハイ！」とアメリカンぶりを發揮し、ノリの合う友達と英語で会話。当然、日本人学校組にはついて行けません。現地校組って…、と顔をしかめる場面も多く目にします。

それでもまだ、帰国生の集まる塾なら周りも慣れていますが、帰国生に免疫のない日本の学校だったらどうでしょう。

英語の先生に指摘をし、目をつけられてしまう、などという話もよく聞きます。中学生くらいになるとそういう情報も耳に入るようで、わざと発音を日本人英語にするんだ、などという子もいます。

見えないところでは、このような苦労もしています。両親に進んで話したい内容では決してありませんので、周りから察してあげる必要があるでしょう。こうしたストレスを軽減するための帰国枠受験という捉え方もあると思います。

さて、これまで少なくとも日本語に不自由のない前提で話をしました。しかし、帰国生クラスであっても、授業レベルの日本語について行けずドロップアウトという例も、少なからずあります。日本語だけの問題に限りませんが、受験を突破できたとしてもその先が続かなければ意味がありません。英語はネイティブ並みだが、日本の授業について行けるのだろうかと感じる場合は、慌てず慎重になることも大事です。

しかしながら、事情によっては十分な日本語教育の準備ができないまま、日本の学校へ編入せざるを得ない場合もあるでしょう。そういった場合は、帰国生のための支援クラスを設けている学校もるので、検討してみましょう。

関西では、「帰国した子どものセンター校（大阪）」、関東では「帰国・外国人児童生徒指導支援校（世田谷）」といった公立や、学芸大・お茶の水大付属のように、JSL（Japanese as a Second Language）のクラスを設けている学校があります。ESLの日本語版ですね。

このように、人によっては乗り越える課題は多いかもしれません。それでも、海外経験を「特技」として進んでいくのか、再日本人化を優先するか。「あのときこうしていれば」が大人の特権ですので、しっかりとと考えてあげましょう。

著者：谷口 仁
Dec 12 2016

